

multilingual translation >  
音声読み上げ・多言語翻訳は  
「カタログポケット」で



みず・まち・自然 エンジョイ!米子

広  
報

# よなご

3

2023  
March  
No.216

特 集

## 地域をつなぐ とんど





# 地域をつなぐと

# んど



**小** 正月の火祭り行事である「とんど」。米子市内でも地

区によってさまざまな特色があり、伝統行事として継承されています。また、神事としてだけでなく、地域行事としても根づき、同じ地域の住民同士が年明けに挨拶を交わす交流の機会にもなっています。

**今** 回は、上和田、東八幡、旗ヶ崎三区を取材し、とんどを中

心に地域がつながる小正月の風景を紹介します。いつまでも残したい地域の伝統が、そこにはありました。





▶歳徳神（柄沢照寛著『安部晴明篋篋内伝図解』、神誠館、明45・2、国立国会図書館デジタルコレクション）  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/759925>（参照 2023-01-27）



鳥取県選択無形民俗文化財

## 「弓浜半島のトンド」

松の内が明けると、正月に飾った松や注連縄などを燃やす小正月の火祭り行事が全国各地で行われます。地域によってさまざまな呼び名がありますが、米子市の多くの地区では「とんどさん」と呼ばれます。弓浜半島の一部では、正月飾りを焚き上げるだけでなく、その年の福德を司る「歳徳神」を神輿などに乗せ、地域内を練り歩く伝承があります。これは全国でも類を見ない行事であることから、「弓浜半島のトンド」として、平成23年に鳥取県の無形民俗文化財に選択されました。

参考資料：『鳥取県文化財調査報告書第二〇集 県選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「弓浜半島のトンド」調査報告書』（鳥取県教育委員会 2012年）



# 上和田

上和田では、とんどの神職を務める15人の当番あたりばんをくじで選出します。当番は、歳徳神の祀まつられた神輿を、大晦日から1月14日まで日替わりで自宅に迎え入れることから、大晦日の大歳番おおとしばんと、一日番いちじつばんから十四日番じゅうよっかばんまでの15人で構成されます。現在では行事が簡略化され、毎日神輿を移動させることはなくなりましたが、事前の神輿の飾り付けやとんど場の設置、そして当日の神輿巡行など、当番がとんどを執り行います。

今年、当番の中でも指揮役を担う十四日番に選ばれた安酸やすださんは、「子どものころ、神輿の巡行に出会ったみかんをもらったりして、楽しかった記憶がある」と振り返ります。安酸さんは今年、初めて当番を引き受けました。

上和田のとんど場に立てる竹は、切らずに根ごと掘り出す習わしです。とんどの前日に近くの竹林へ行き、数人がかりで竹を掘り出し、運び、とんど場に立てます。

さらに当日は1日仕事です。朝から翌年の当番のくじ引きをし、屋前から町内の練り歩きを始め、弓ヶ浜のとんど場に火入れをするのは夕刻になります。また、翌日には祝い餅を切り分け各戸に渡して回るため、とんどの行事は3日間にわたります。

しかし、安酸さんは「やることが多くて大変だったけれど、終わってみると、やって良かったと思う」と、しみじみ。初めてで何もわからなかった自分に色々教えてくれた地域の先輩たち、練り歩きるときに声をかけてくれた町内の人たち、15人の当番で協力して築いた絆に、「とてもありがたく、地域の人たちの温かさを感じた」とほほ笑みます。

人口減少や高齢化で担い手が不足する中、「脈々と受け継がれてきた伝統を、自分たち若手を中心となって、どのように後世に残せるか考えたい」と、安酸さんは思いを巡らせます。

- 1) 神輿は普段、釣船神社境内の納所に安置されている 2) 当番を決めるくじは、名前の書かれたこよりを扇の上でゆすり、最後に残ったもので決まる 3) 15人の当番の中でも、大晦日に神輿を迎える大歳番と、当日の行事で指揮を執る十四日番は、袴の色が水色と紫色で区別される 4) 町内を一筆書きの道順で練り歩く 5) 大歳番と十四日番は家々をお祓いする 6・7・8) 火渡しの前に、海に拝礼して十四日番が海水をくみ、とんどの山を回りながらホンダワラという海藻を使って海水をかけて清める



5



3



1



7



4



2



8



6



# 東八幡



東八幡では、歳徳神に加え、収穫を司る大歳神、御歳神と、その土地の神である八幡神が神輿で巡行します。神々が納められた小祠は飾り付けされ、竹の棒に乗せられ、白装束と烏帽子を身にまとった担ぎ手によって担がれます。天狗の面を被った年男は、太鼓の叩き手と共に、町内の家々を笹でお祓いをして回ります。

とんど場には大きな孟宗竹が立てられます。「竹にはアカマツ(女松)で作った縄はしごを腰巻に見立て、女性を表します。そこに、クロマツ(男松)を削ったものを男性に見立てて吊り下げ、五穀豊稔を祈ります」と、八幡神社の宮司・内藤さんは言います。

宮司が祝詞をあげてお祓いをし、とんどに恵方から火を点けました。赤い炎と黒煙の中で竹が爆ぜ、くべられた書初めが火の粉となつて空へ舞い上がります。集まった人たちは、お神酒を酌み交わし、和やかに火を囲みました。

# 旗ヶ崎三区

旗ヶ崎三区のとんどは、3人の頭屋と呼ばれる世話役と、「旗ヶ崎三区とんどさんの会」の役員が中心となつて執り行います。当日の朝に公民館で神事を行い、頭屋が種火を灯して、とんど場に移動して火渡しをします。

また、旗ヶ崎三区では、とんどの神事や火渡しの前に「旗ヶ崎三区荒神神楽」が奏されます。神楽は竹製の縦笛と大太鼓、縦太鼓からなり、有志が数か月前から練習します。神輿巡行の際は子どもたちがリコーダーで演奏していましたが、ここ数年は新型コロナウイルスの影響で中止しており、「また子どもたちとにぎやかに巡行できれば」と、役員の見聞さんは話します。

火渡しの後、獅子頭が子どもの頭をかんで周ると、「キャー」という元気な声が響きました。勢いよく燃えるとんどの火が地域を照らし、人と人を温かくつなぎます。

(了)

